

## 第2節 第4 畧状区間～第13畧状区間

### (1) 第4 畧状区間

この区間の城壁は、第3 畧状区間の城壁上面からの流水によって版築土塁の大部分、とくに中央部は外側列石の直上まで大きく流失していた。このため、近代になって砂防石垣や砂防土段で部分的に修復されており、現況の城壁上面が遊歩道として利用されていたところである。西門からこの区間にかけては、前面の斜面の谷頭に近いこともあって、傾斜は緩やかだが次区間あたりからは急斜面となっている。

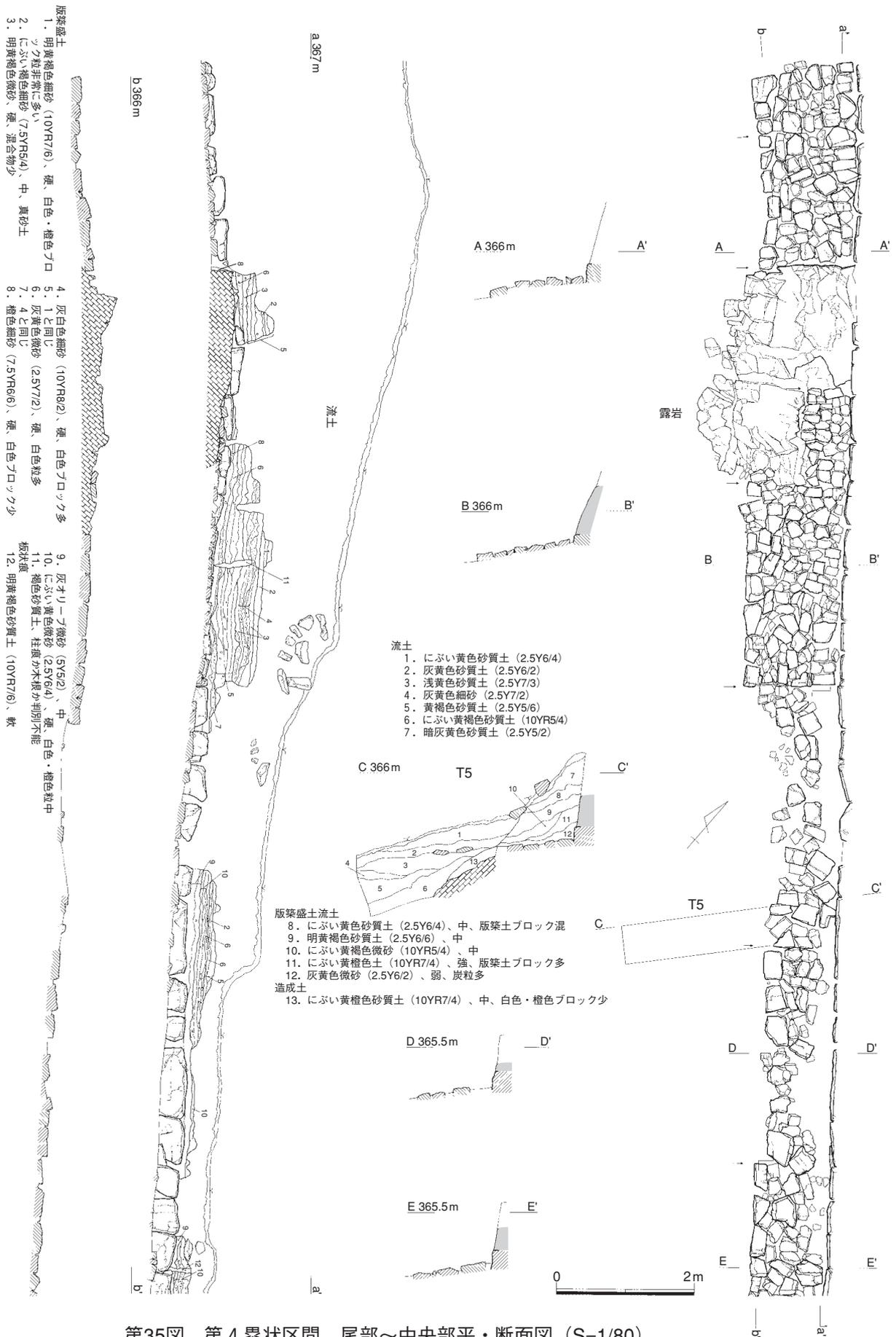
<外側列石> 1石を欠くのみで完存とっていい。二か所ほどは露岩をそのまま利用しているが、花崗岩を主材にしアプライトも交えて上面と前面を揃えて1段1列に並べ置いている。石材は転石のままか粗割程度で、それ以上の加工はないようであり、あったとしても面の粗いハツリぐらいかと思われる。規模は1mほどのものもあるが、40～60cmぐらいのものが多い。石材の奥行をどれほどとっているか不明だが、立面側の高いものは少なく寝かせ置いている。

区間全体をみると、肉眼的には水平に近いが、次区間へ向けて5度ぐらい下降傾斜している。

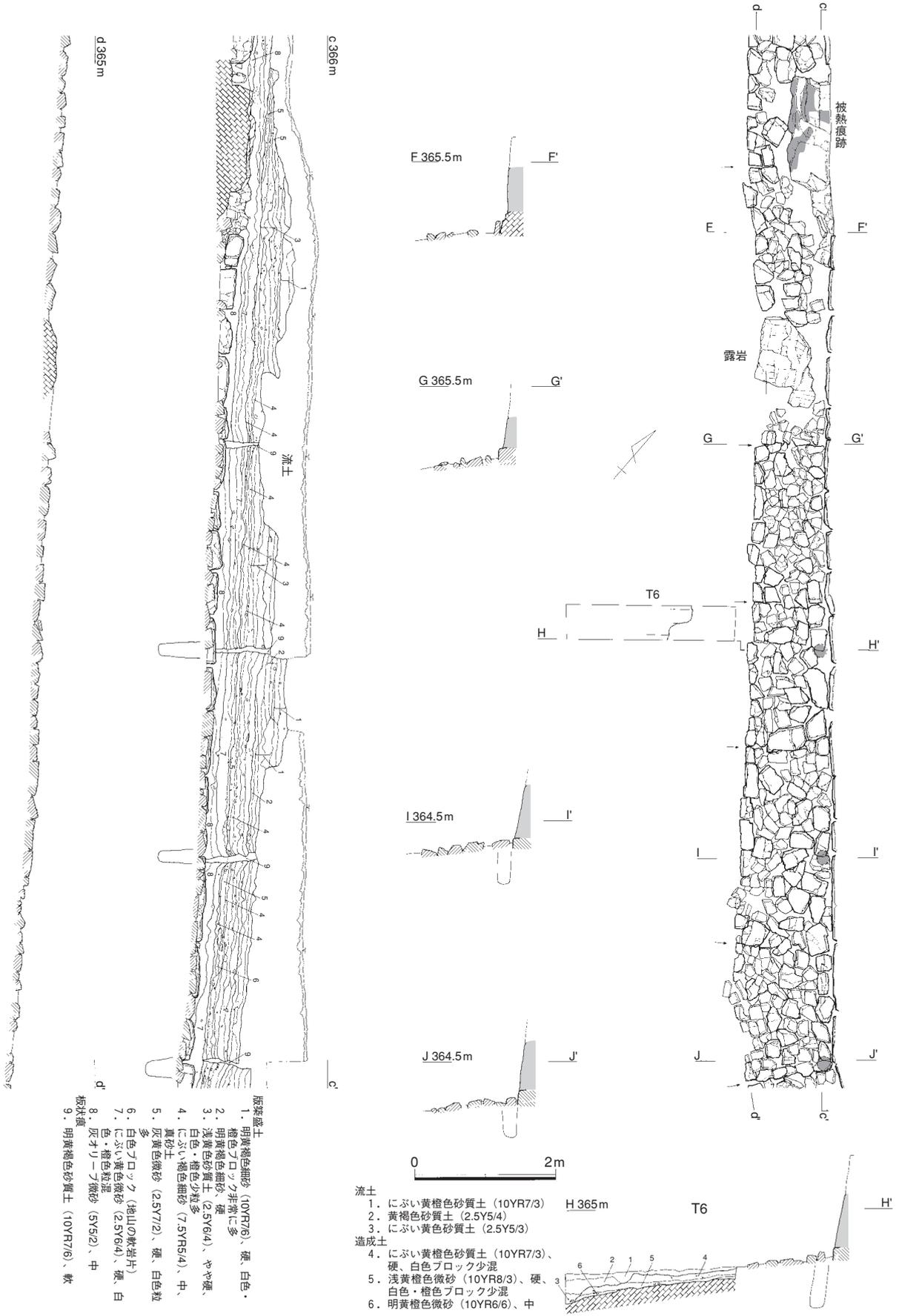
<版築土塁> 土塁の残存はよくない。城壁外面でみると、区間尾部から中央部までの残存が悪く、それより頭部の方がややよい。これは第3 畧状区間城壁天端側からの流水の影響である。残存する土塁は高さ40～80cmほどで、残りのよいところでも1mにすぎない。立ち上がり角度は80度前後で、ほぼ垂直に近い。最もよく残っているところで見ると、版築の単位層は15～17層を数える。列石直上は15cmほどのやや厚い層があり、中間層は2～3cmの薄層を含むが、多くは6～8cmぐらいの層で積み上げている。積み上げは外側列石の代用とした露岩の高さに規制された石材の配置をしているらしく、列石上面にやや高低があるためか、低いところから積み始めて盛土の高さを調節しているようである。それより上層の各単位層は、地形の傾斜に近い水平状の積み方で積み上げており、そうした作業の反復でこの区間を構築している。流失、欠失による部分があるものの、各単位層は概して長く、正面からみた版築層には、あるところを境にして左右の土質が明瞭に変わるところは認められない。こうした状況であるから、この区間についていえば、いわれているような作業単位というか、作業区間というか、それらを類推させるような明瞭な横方向の仕切り痕跡は認められない。そうだとすれば、この区間全体が一体的な一つの作業区であったことになろうか。

ただ、気になるのはほぼ3mぐらいの間隔で検出された6本の、最大幅でも10cm弱、高さ50～80cmの柱状というか棒状というか、縦長の土層の存在である。試みにその一つを掘ってみると、部分的に深さは異なるものの、最深部でも15cmより奥へはピンポールも通らない堅い版築層にあたる。幅と深さからすれば、柱や棒のようなものとは考えにくく、むしろ板のようなものの痕跡とみたほうがよさそうである。適切な表現ではないが、これを板状痕と仮称しておこう。なお、この板状痕を境にしても版築各単位層はわずかに盛り上がる傾向にはあるものの、左右とも同一層である。したがって、1区間内の作業小工区を示すものとはならない。これらの板状痕の位置の前面には、すべてで確認できたわけではないが、後述する外側列石前面にある柱穴の位置と合致するから、版築築成となんらかの関わりをもつものであろうか。

版築土は、アプライトの風化土を順次積み上げたもので、明瞭な他質土との互層ではない。残存す



第35図 第4 壘状区間 尾部～中央部平・断面図 (S=1/80)



第36図 第4 墓状区間 中央部～頭部平・断面図 (S=1/80)



1. 尾部側から頭部側を望む



2. 中央部付近



3. 版築各層の状況



4. 板状痕



5. 前面の造成状況



6. 板状痕掘り上げ

る版築土は、粒子の細かい土質で堅くよく締まっている。

この区間は平成14年に調査を終了し、整備工事区間に隣接することもあって、調査後そのまま露出させていたが、同年冬季の冷え込みによる霜柱の影響をうけ、表面が爛れたり、数mm程度の煎餅状に薄く剥落したところもあるが、調査後の外表面をそのまま保つところの方がむしろ多い。

＜城外側敷石＞ 第3壘状区間の流水路となった区間中央部のあたりの一部を除いて、敷石の残存状況は良好である。1～1.4m幅で敷設しており、頭・尾部側がやや幅広く、中央部が幅狭い敷設となっている。石材は40cm大のものを最大とするが、全体的には小型材を用い隙間なく敷いている。残存する敷石石材の97%がアプライトである。敷石の前端線は、石材の長辺を城壁の長軸と平行に並べている。敷石の長軸側の傾斜は、城壁の傾斜に合わせるのはいうまでもないが、短軸側は前面へ5度ほど下降傾斜させている。

＜城外側柱穴列＞ 敷石の残存状況がよいので、柱穴は頭部寄りの3穴を検出したのみである。底径

15cm前後、深さ60cm強である。これら3穴の柱間はほぼ3mであるから、区間全体としては両端を含め12穴あることになる。これら柱穴の位置するところは、先述した板状痕の位置するところと一致するが、尾部寄りのところでは必ずしも一致しないから、多少柱間間が異なるのであろうか。

敷石の敷設状況からみると、柱穴の位置にも敷石が敷かれているから、柱は敷石の敷設前に撤去されており、永定柱のような形で残ることはない。

<前面の造成> 小トレンチでの観察だが、城壁前面もかなり広く造成されている。地山まで掘り下げたのち、敷石敷設部からさらに広く盛土造成しているが、版築層のように堅い層ではない。造成幅は地形に左右されるのは当然であるが、この区間では2～3m以上の範囲に及んでいる。

<土塁中の柱穴列> 城壁の内壁となる内側列石に添って土塁中にも柱穴がある。折れの両端を含めて12本が直列状態で検出された。上面径はやや大きい、底径の解るもので30～40cmとなり、以外に大きいものである。

これらの柱穴は、地山から70～100cmほど版築盛土されたのち、布掘りして柱を据えている。柱間は3.0～3.2mである。城外側の柱穴は12本であり、土塁中の柱穴も12本だから数は一致する。しかし柱径や深さは異なっており、また一方は撤去されるのに対し、一方は抜き取り痕跡がなく、永定柱として残るものである。この両者はどのような役割をもつ柱なのか、興味を惹かれる。なお、土塁中の柱の底面は、外側列石上面の2.6mほど上位になることを付言しておきたい。

<内側列石> 城壁の内壁となる内側列石は、尾部に7石で3mほどと頭部に1石が残るのみである。石材は40～70cmほどのアプライトで、広口面を立て上面を揃えて並べ置いている。この内側列石の上面まで版築土が積まれていたことは疑うべくもないが、そこからどれくらい高くまで積まれていたかについては、確認できるところが他の区間にもないようである。したがって、城壁の高さについては、当面のところ内側列石上面までとするほかはない。

<城内側敷石> 鬼ノ城で、このように広範にしかも多量に敷石が検出されたところは他にはない。一部に欠失はあるものの、4～5m幅で区間全体に敷設されている。尾部側からみると、15mほど先までは3段になっている。ただ、段といっても数cmほどのものである。内側列石に近いものから仮に上、中、下段と呼んでおこう。上段は内側列石に添ういわば基本的なパターンで、他区間にも普遍的にみられるものである。尾部と頭部にのみ残っており、他は土塁の流失により欠失している。幅1.5mで他の段に比べやや大きい石材の使用が目立つ。中段はほぼ完存といえる。上段より数cm低く据えている。上段と接するラインはきれいに残っているが、下段と接するラインは尾部から15mほどのところから不明瞭になって、下段と一体化したものになっている。ここでも基本的な幅は1.5mであるが、頭部側へ移るにつれ、やや狭くなっている。下段も同じように少し低いところから敷き並べる。この段の石材は小型のものが多。区間の中央部から頭部へかけては、中段と下段の境がなく、混然としたものになっている。ただ、頭部寄りに長軸に直交するように2.5～3.5m間隔の4列ほどのラインがみえる。なんらかの単位的な区画のようなものの可能性もあろうか。敷石は長軸側では次区間へむけて3～4度下降し、短軸側は20度ほど城内側へ下降している。

城外側敷石は、基本的には幅1.5mのものが1列に敷設されているが、城内側敷石は城壁と城内空間の広さによって、基本的な1.5m幅のもの他に、空隙を埋めるように小石材を充填している区間もある。この区間の状況も同様なものであろう。石材は約70%がアプライトで、30%が花崗岩である。この比率は他区に比べ花崗岩の比率がたかい。



第37図 第4 墨状区間 尾部～中央部城内側敷石平・断面図 (S=1/100)



第38図 第4 墨状区間 中央部～頭部城内側敷石平・断面図 (S=1/100)



第17図版 P41断面（南東から）

第39図 P41

P41柱痕埋土

1. にぶい黄橙色微砂 (10YR6/4)、軟
  2. 〃 (10YR7/4)、軟
  3. 灰黄褐色微砂 (10YR6/2)、軟
  4. にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2)、軟
  5. 灰白色微砂 (10YR8/1)、中
- 布掘り埋土
6. にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3)、軟
  7. 明黄褐色砂質土 (10YR6/6)、中
  8. 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2)、中
  9. にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2)、中、礫混
  10. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)、中
  11. 浅黄色微砂 (2.5Y7/4)、軟
  12. 灰黄色微砂 (2.5Y7/3)、中
- 版築盛土
13. 浅黄褐色細砂 (10YR8/3)、硬、白色粒非常に多
  14. にぶい黄褐色細砂 (10YR6/3)、硬、白色粒少
  15. 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2)、硬、炭粒多
  16. 橙色細砂 (7.5YR6/6)、硬、白色粒少、真砂土で構成
  17. 褐色砂質土 (10YR4/4)、硬、白色粒少

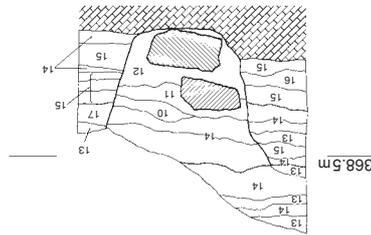
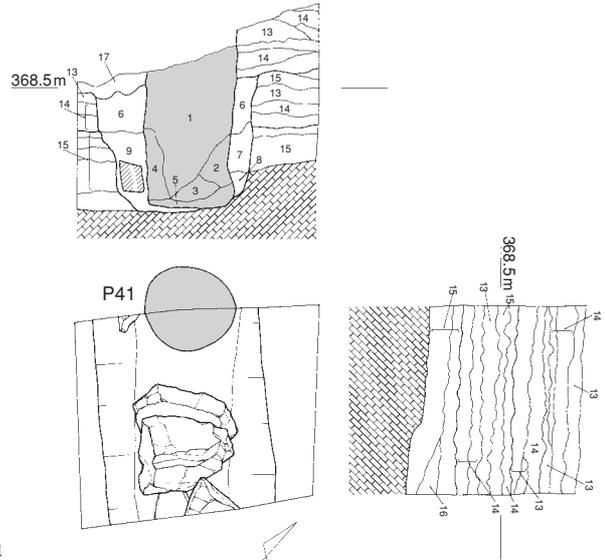
第40図 土壌

1. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)
  2. 明黄褐色砂質土 (2.5Y7/6)
  3. 灰黄褐色砂質土
  4. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)
- 土壌埋土
5. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1)、炭粒多混
  6. 灰黄褐色砂質土
  7. 黒色炭土、橙色粒多

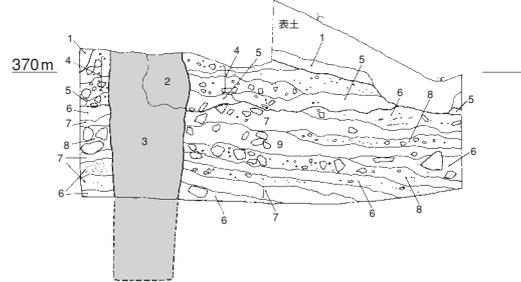
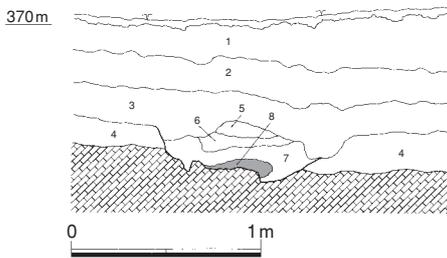
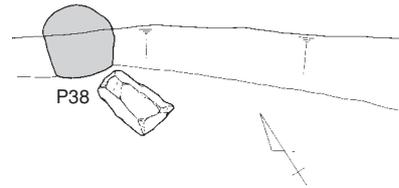
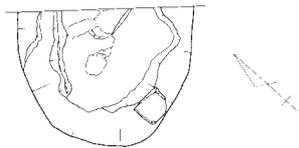
第41図 P38

流土

1. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)、中
- P38柱痕埋土
2. にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3)、軟
  3. にぶい黄褐色微砂 (10YR6/3)、軟
- 版築盛土
4. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)、硬、白色・橙色粒多
  5. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3)、硬、白色礫を少含、炭少混
  6. 浅黄褐色微砂 (10YR8/3)、硬、白色粒多
  7. にぶい黄褐色微砂 (10YR7/4)、硬、白色粒少
  8. 灰白色細砂 (10YR8/2)、硬、5cm前後の白色礫非常に多い
  9. にぶい黄褐色細砂 (10YR6/4)、硬、5~7cmの少礫含



第39図 P41 平・断面図 (S=1/40)



第40図 土壌 平・断面図 (S=1/40)

第41図 P38 平・断面図 (S=1/40)

この区間は平成14年度の調査後、残存する敷石の保護対応を兼ねて、欠失部の敷石と内側列石を補修した。

いずれにしても、この区間の敷石は圧巻であり、見事というほかない。

第18図版 第4 壘状区間 城内側敷石調査時（1～5）と敷石修復後（6～8）



1. 城内側敷石



2. 土塁中の柱穴列  
(北西から)



3. 土塁中の柱穴列  
(南東から)



6. 尾部から頭部を望む  
(北西から)



4. 尾部（北から）



5. 作業単位的区画？  
(北東から)

7. 尾部（北から）



8. 第5 壘状区間尾部から（南東から）



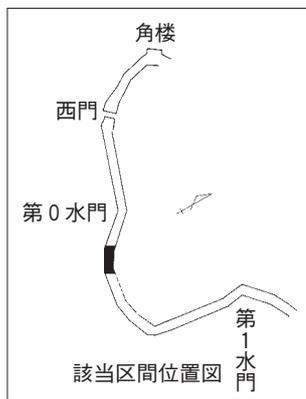
これらの調査結果から、この第4 塁状区間は、第3 塁状区間から33度外折する外側長32.0m、内側長34.5m、城壁の下底幅6.8~7.7m、高さは外側列石上面から内側列石上面までで5.3mの区間となる。また、城壁の内外に敷石が敷設されており、内側列石に添う土塁中には、径30cm以上の柱がほぼ3 m間隔で12本立っていたことになる。

## (2) 第5 塁状区間

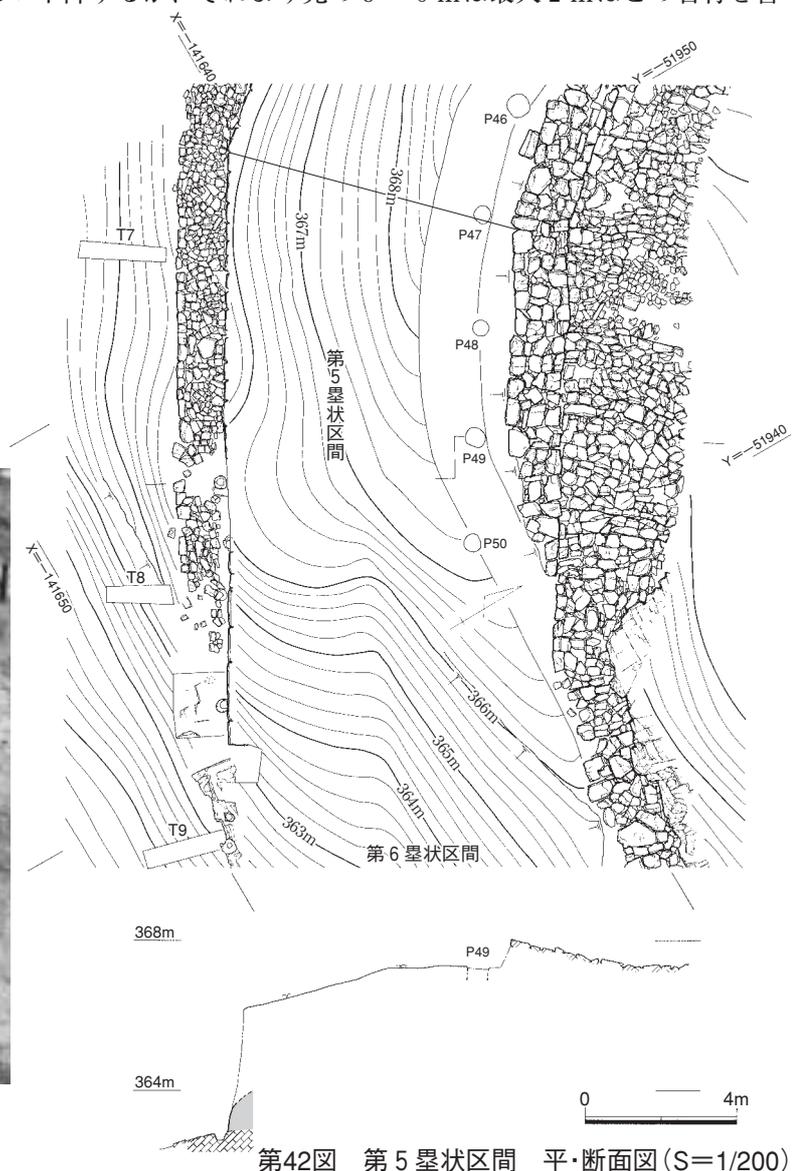
この区間から第1 水門までは、地形に起因して鬼城山から東南に派生する尾根をとりまくように城壁が走るので、内折した区間となっている。第5 塁状区間から第8 塁状区間までの前面の斜面は、谷頭を離れるにつれ急斜面になっており、各区の城壁は次区間へ向けて順次下降しつつ巡っていく。一見したところ、区間の残存状況は良いように見えるが大半は流土であり、頭部のあたりからは流水路となって次区間の城壁に大きな影響を与えている。

第5 塁状区間は、第4 塁状区間から21度内折した区間である。

<外側列石> 中央部の少し先で、露岩とその上に盛った造成土に版築を積み上げているところがあるが、その他のところは外側列石が残存している。前区間と同様で1段1列に並べ置いている。このうち、尾部から15mほどは5度くらい下降するが、それより先の5~6 mは最大2 mほどの石材を含



第19図版 城内側敷石（西から）



第42図 第5 塁状区間 平・断面図(S=1/200)



む大型材を用い、上部が水平になるように並べ置いている。土圧を考慮した措置と思われる。次区間との境になる頭部のあたりはアプライトの露岩で代用している。列石の石材は2石を除き花崗岩で、転石のままか、粗割り程度である。

＜版築土塁＞ 前区間と同様に、高さ1mほどがこの区間の全体にわたって残っている。中央部から頭部にかけて高く残っている土層は、版築の流土である。版築層の状況は層の厚薄や土質、堅さなどをはじめ、前区の第4 壘状区間と同工である。列石の上部に厚く盛って積み始めるが、層の状況を見ると、最下層の厚層がこの区間の全体にみられるのではなく、中央部から尾部側を先行して盛ったようである。上層については、下層ほど明確な線は引けないものの、ほぼ同じあたりの上部に微妙な変化がみとめられるので、同様の仕方で築成していったものと思われる。この区間でも単位層は長くのびており、あるところを境にして土層が明確に変わるような、いわば築成の作業単位を示すようなところはない。仮にそうしたものが存在するとすれば、最も可能性の高そうなところは区間を区切る折れのところではないかと思われるが、そこにもそうした形跡は認めがたい。しかし、ここでも前区間で検出されたような板状痕が5つ確認された。規模的には前区間のものと同じであるが、想定される位置で検出されなかったり、列石上から痕跡が残るものがあったり、上部の方だけ残るなどの違いもある。土質はアプライトの風化土であり、概して薄層～中層程度の厚層であり、堅くよく締まっけて、調査時に土層を削るのにその堅さに苦労したほどである。

調査後、版築層は露出したまま公開しているが、冬季には霜柱のため爛れ、薄く剥落しているのは前区間と同様である。

＜城外側敷石＞ 尾部から中央部にかけてはほぼ完存、それより先は流失が目立ち、頭部あたりは殆ど流失している。幅は1.1～1.25mとやや幅狭いが、前端をきれいに揃え隙間なく敷設している。この敷石についても、折れとなる部分に作業単位や工区をしめすような状況は認められない。敷石は、長軸側は土塁の傾斜に、短軸側は前面へ5～10度傾斜させている。残存する敷石の石材は、95%までアプライトの板状石である。また敷石前面の造成は、尾部側は傾斜が緩いこともあって2m以上もあるなど幅広いが、頭部側は斜面傾斜が次第に急になることもあって幅狭くなる。

＜城外側柱穴列＞ 敷石が欠石しているところで3穴を検出した。底径15～20cm、深さ23～46cmである。3穴の柱間は2.9mと3.0mであるが、次区間との折れになる最頭部の列石に代用しているアプライトの露岩に小穴が二つ穿たれている。一つは径15cm、深さ10cmぐらいであり、もう一つは径12cm、深さ8cmほどの小穴である。この二つの小穴のどちらかが、次の区間の折れの位置を示しているのかは判断に迷うが、柱間は3.0mと3.7mになるから、手前の小穴を次の区間との折れの位置とみたほうが妥当のようだが、折れを考慮すると先の穴に変化点があるようで、そうすると柱間が通常より長くなるが、次の第6 壘状区間の尾部に同じような小穴が二つあり、その位置関係からみてそのほうが適切かと思えるからである。いずれにしても岩盤に穴を穿っているほどだから、これらの外側列石前面にある柱穴の存在は、大きな役割をもっていることは疑いなかろう。

＜土塁中の柱穴列＞ 前区間との境になるものを含めて4穴検出している。これより頭部側は未調査であるが、距離的にみるともう2本が想定されよう。いずれも検出したのみで掘り下げていないが、径は40～51cm、柱間は2.8～3.0mである。

＜内側列石と城内側敷石＞ 流失したのか転用したのかわからないが、内側列石はすべて欠失している。城内側敷石は比較的よく残っている。第4 壘状区間の頭部側の敷石につづくもので、本来内側列



第44図 第5 壘状区間 城内側敷石平・断面図 (S=1/100)

石に接して敷設されているものは、幅1.5mの基本パターンで10m弱が残っているが、これより頭部側は内側列石とともに欠失している。前区間の第4 壘状区間では、尾部側に4 mほどの幅で広がっていたが、この区間の尾部にもほぼ同じような幅で敷設されている。この広い敷石帯は、城壁と城内平坦部の間にかかなり広いスペースがあるからで、これより先はそうした平坦部がほとんどなくなり、アプライトの露岩が迫り出してきているため、全体の敷石幅は狭くなっている。内側列石に添っている本来の敷石の石材は、前区間と同じように大きいものを使っている。それに接した敷石の石材もやや大きいものが目立ち、露岩ぎりぎりまで隙間なく敷いている。前区間でみた作業単位的な特徴のある石材の配列が、ここにも2、3列みられる。中に小型材ばかりが目立つ区画もある。敷石の傾斜は、長軸側は15度弱次区間へ向けて下降し、短軸側は城内側へ15～20度下降している。

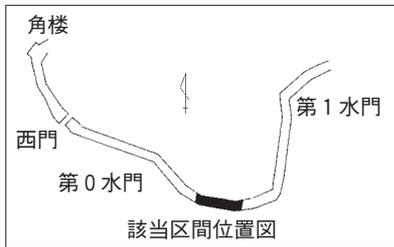
これらの調査結果から、第5 壘状区間は第4 壘状区間から19度内折した外側長18.5m、推定内側長16.6m、推定城壁幅7.3～7.7m、推定高さ5.3mくらいの区間となろう。城壁の内外に敷石が敷設されており、土壘中に数本の柱が立つ区間となる。

### (3) 第6 壘状区間

昭和46年(1971)、ここで神籠石状列石と他区間で水門が発見され、鬼ノ城が古代山城として報告された記念すべき区間である。現状は外側列石と城内側の敷石の一部が残るのみで、版築土壘はすべてとっていいほど流失している。城壁前面の傾斜は、この区間あたりからは急斜面となる。第5 壘状区間から20度内折した区間である。

<外側列石> 第5 壘状区間の頭部から、この第6 壘状区間尾部のあたりには、10mほどもある大きなアプライトの露岩があり、それを外側列石に代用している。その先の10mほどは低い露岩の凹凸の間に石材をいれて列石としている。このあたりまでは、全体的には10度弱ほど下降している。ここからは、鬼ノ城の外側列石としては比較的大型材の16石で、整った区間を構成している。しかし、中央部あたりの9石目からは2度ほど下降しつつ次区間となっている。石材は4石がアプライトのほかは花崗岩である。石材の大きさは詰め石的なものを除けば幅40～115cm、高さ35～55cmで、奥行きも1石を除けば50cmをこえている。石材は転石のままか粗割り程度で、それ以上の加工がないのは他区間例と同じである。ことによると、粗割りののち多少は面を大雑把に整えるためのハツリはあるのかもしれないが、筆者には確信がない。

<版築土壘、城外側敷石・柱穴列、前面の造成> 版築土壘は区間の全体にわたって殆どとっていいほど流失している。これは第4、5 壘状区間の城内側からの流水によるものと思われ、現在でも降雨時にはそれを首肯する状況を見ることが出来る。平成12年(2000)度のトレンチ調査でも、各版築層の地山に接するところが僅かに残存しているのみであった。城壁となる部分の中央から前面にかけての地山は段状に削り整え、外側列石を据える部分は1 mほどのスペースを確保している。列石直上からは15～30cm弱の厚い層が数層あり、その上部分は薄層で積まれている。厚層がやや多いものの、傾向的には他区間とよく似ている。列石前面の柱穴については検出できないが、露岩を掘り込んだ小穴が前区間の2穴のほか新たに2穴が280cm間隔で検出された。この時の調査では、城内壁に近い部分を掘り下げると、城内側敷石が崩落する懸念もあつたり、また敷石上が遊歩道となっていることもあつて調査していない。

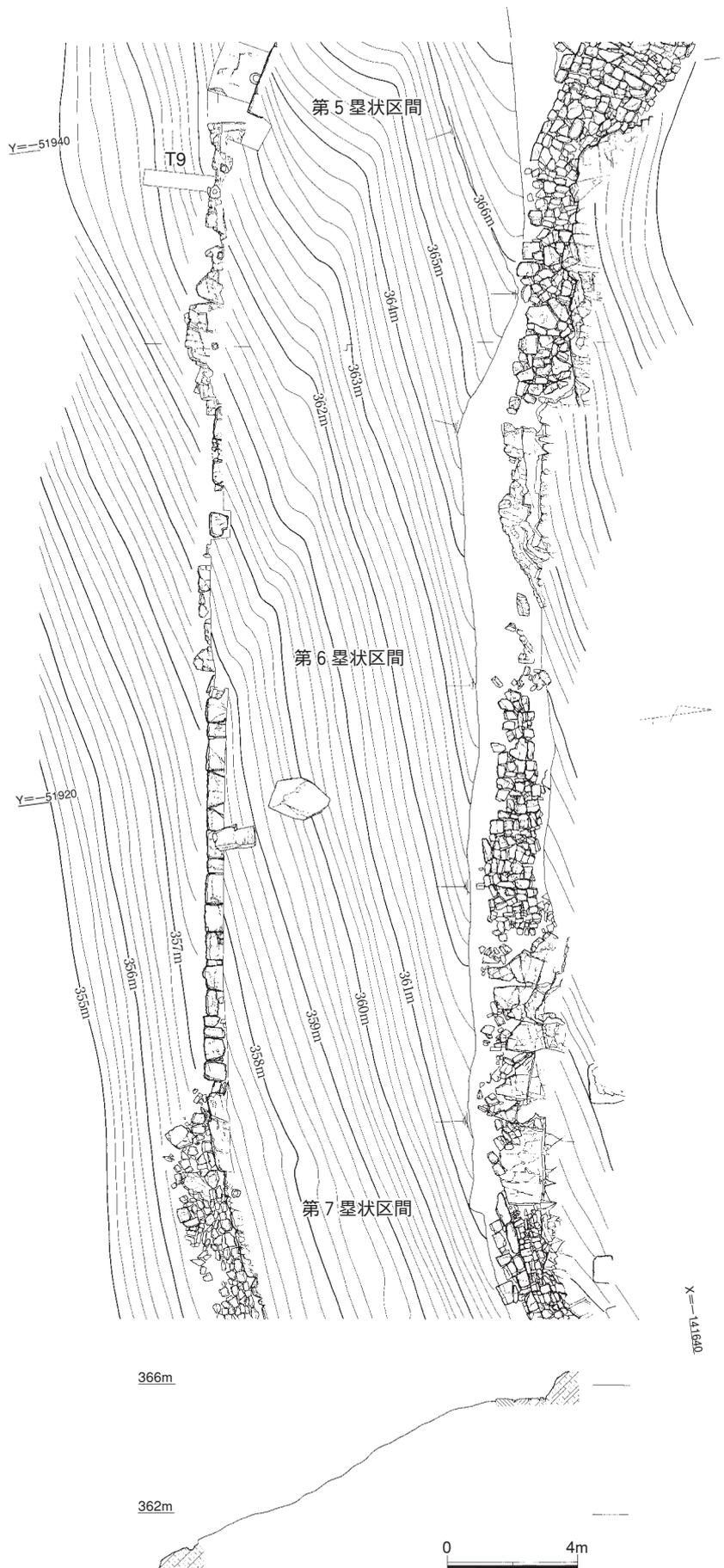


城外側敷石は全部流失している。僅かに2、3のアプライトの板状石が動いた状態で残っていた。あるいは上方からの転落という可能性もないではないが、かつての敷石の一部と思われる。これまでの調査状況からみて、この区間だけ敷石が敷設されていなかったとは考えにくく、他区間と同様にこの区間にも1.5m幅前後の敷石が敷設されていたと考えられる。

城外側の柱穴列についても調査していない。というのも、外側列石の中には底面まで前面が流失しているものもあり、調査をすればその後の修復が困難なため、実施できなかった。しかし、版築が築成されていることからすれば、柱穴が掘られていたとみてよからう。

前面はすでに急斜面になっていて、どの程度造成がおこなわれていたか不明である。傾斜からみて、他区間よりは狭かったであろうが、敷石を想定するならば2mほどの造成はあったのだろうか。

<内側列石と城内側敷石> 内側列石も版築土とともにすべて欠失している。城内側敷石も本来の敷石は城内端部の敷石が残るのみである。鬼城山から東南に派生する尾根斜面の傾斜変換点に城壁が構



第45図 第6壘状区間 平・断面図 (S=1/200)

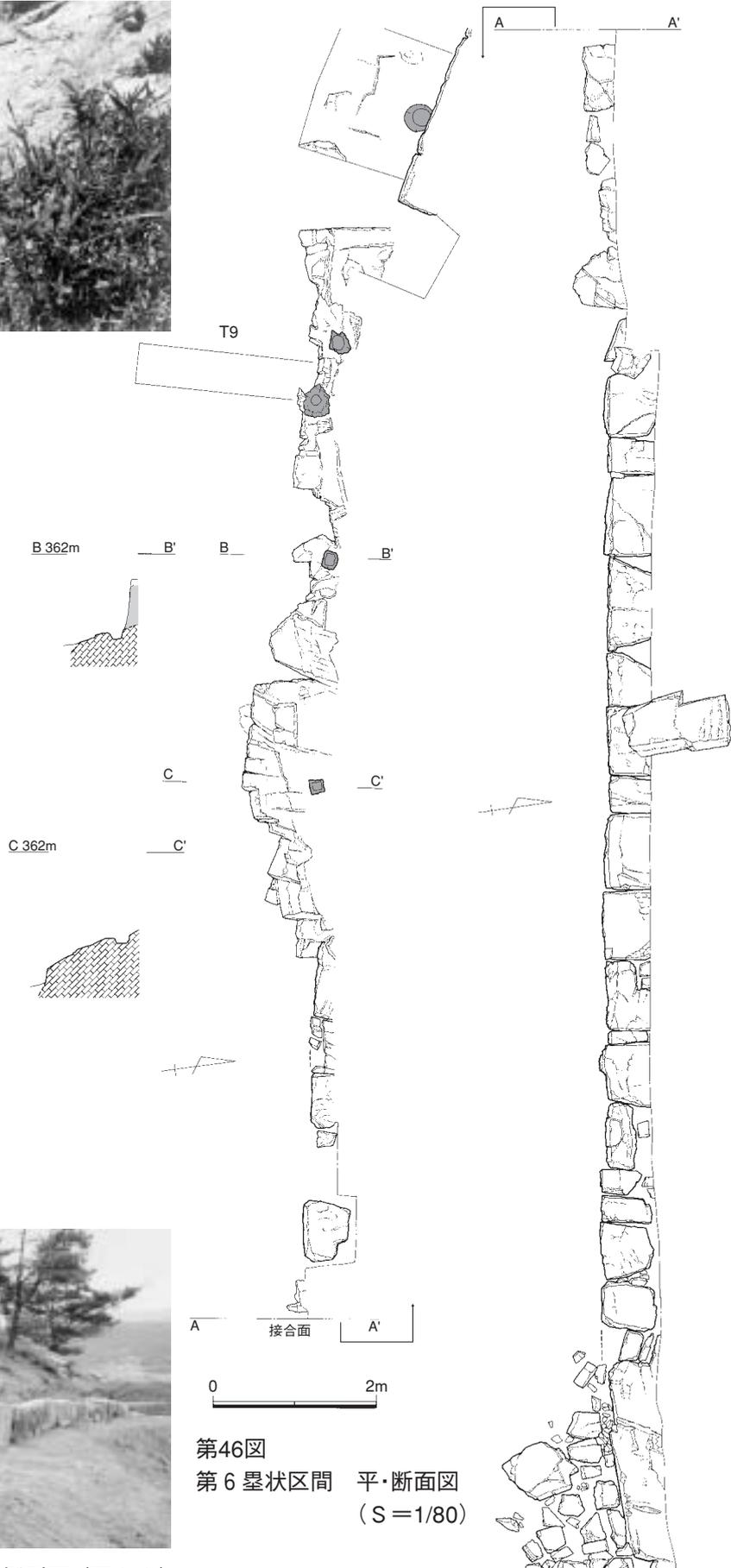


第20図版 露岩中の柱穴

築されているため、城内部に平坦なスペースはなく、低い斜面が下ってきている。アプライトの露岩が随所にあり、その空隙を巧みにアプライトの板石で充填している。この部分は二次的な敷石であるが、なかには露岩の一部を摂理に沿って剥ぎ取って小さな場をつくり、そこに板石を充填しているところさえもある。こうした状況であるから、城壁の内側長や城壁幅については、前・先区間との折



第21図版 第6 壘状区間 外側列石 (西から)



第46図  
第6 壘状区間 平・断面図  
(S=1/80)



第47図 第6 塁状区間 城内側敷石平・断面図 (S=1/80)

れの状況や残存する敷石のラインから想定するしかない。

以上の調査状況から、この第6 塁状区間は第5 塁状区  
間から20度内折する外側長28.2m、内側推定長26.1m、  
城壁幅は中央部で6.8m、城壁推定高5.3mの区間となる。



第22図版 第6 塁状区間 城内側敷石  
(西から)



第23図版 第6 塁状区間  
修復後の城内側敷石(東から)

B 364m — B'



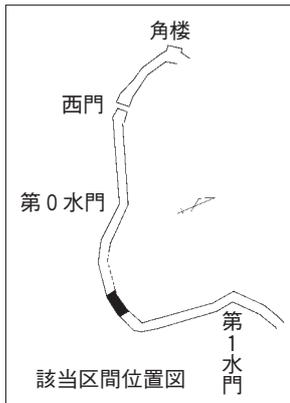
C 362m — C'



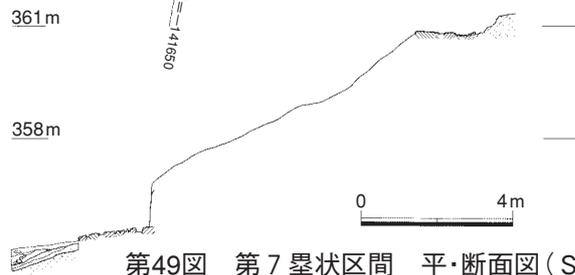
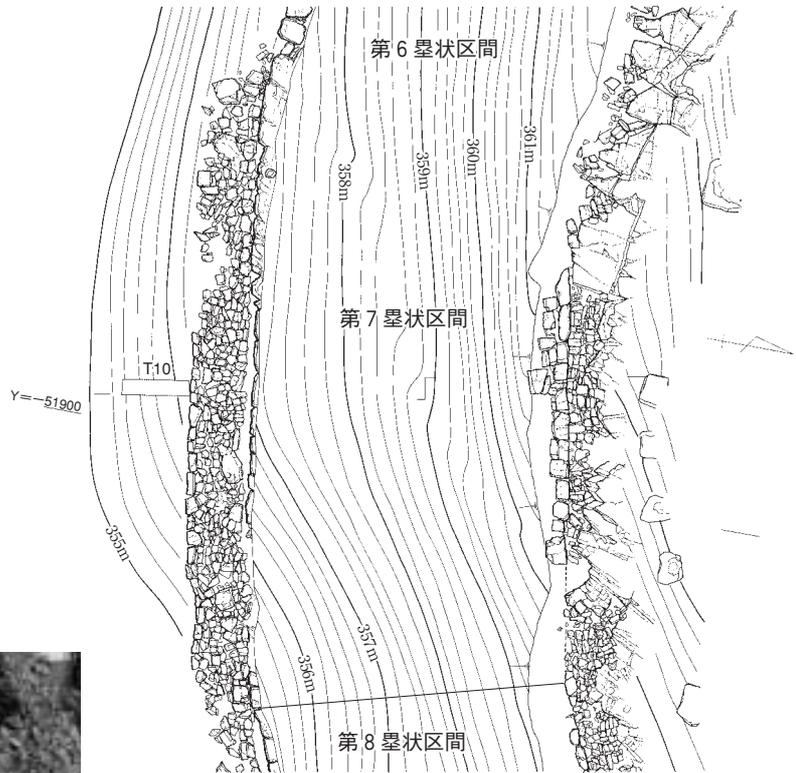
0 2m

第48図 第6 塁状区間 城内側敷石  
平・断面図(S=1/80)

(4) 第7 壘状区間



第24図版 第7 壘状区間 版築層  
(南西から)

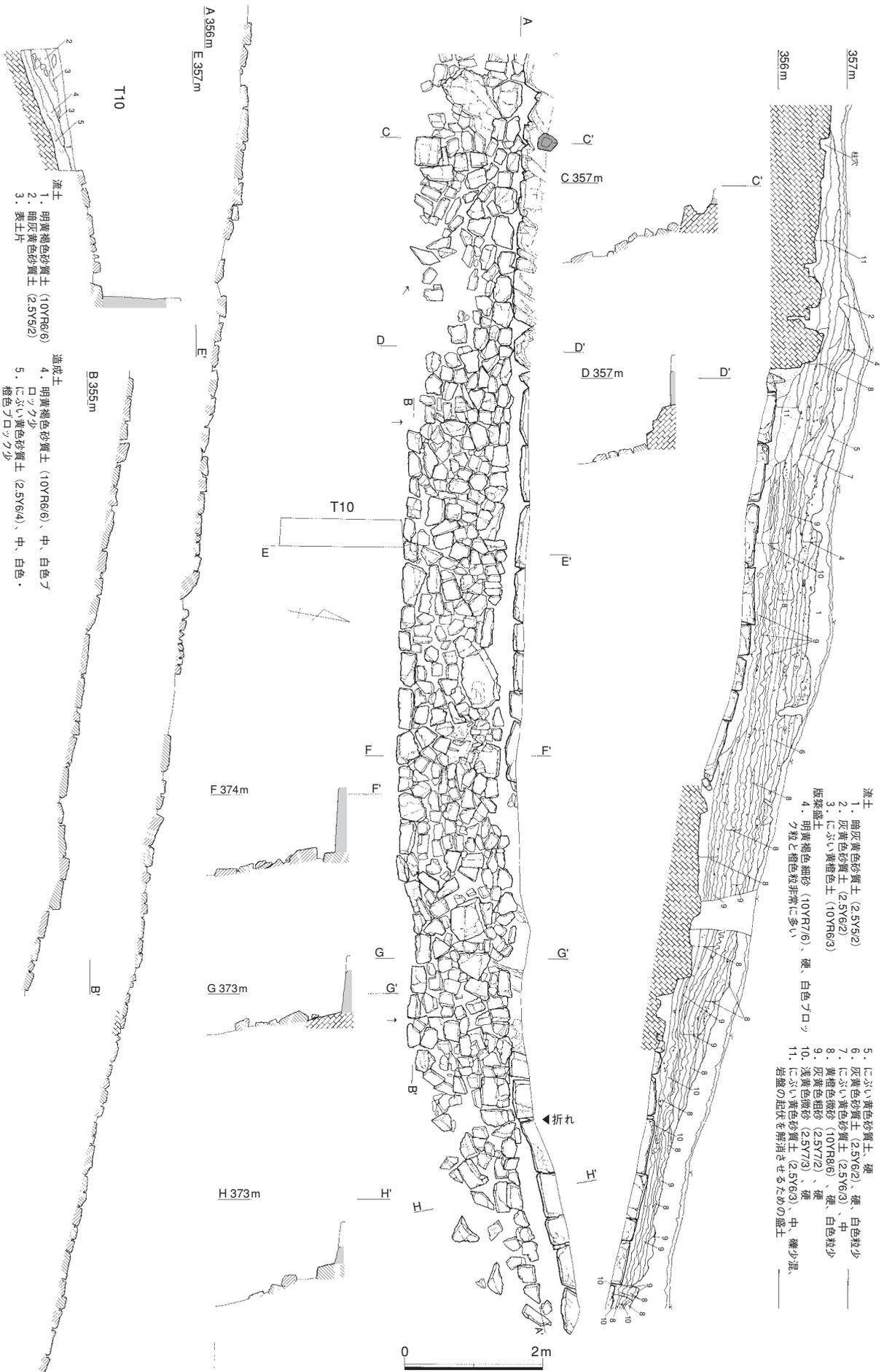


第49図 第7 壘状区間 平・断面図 (S=1/200)

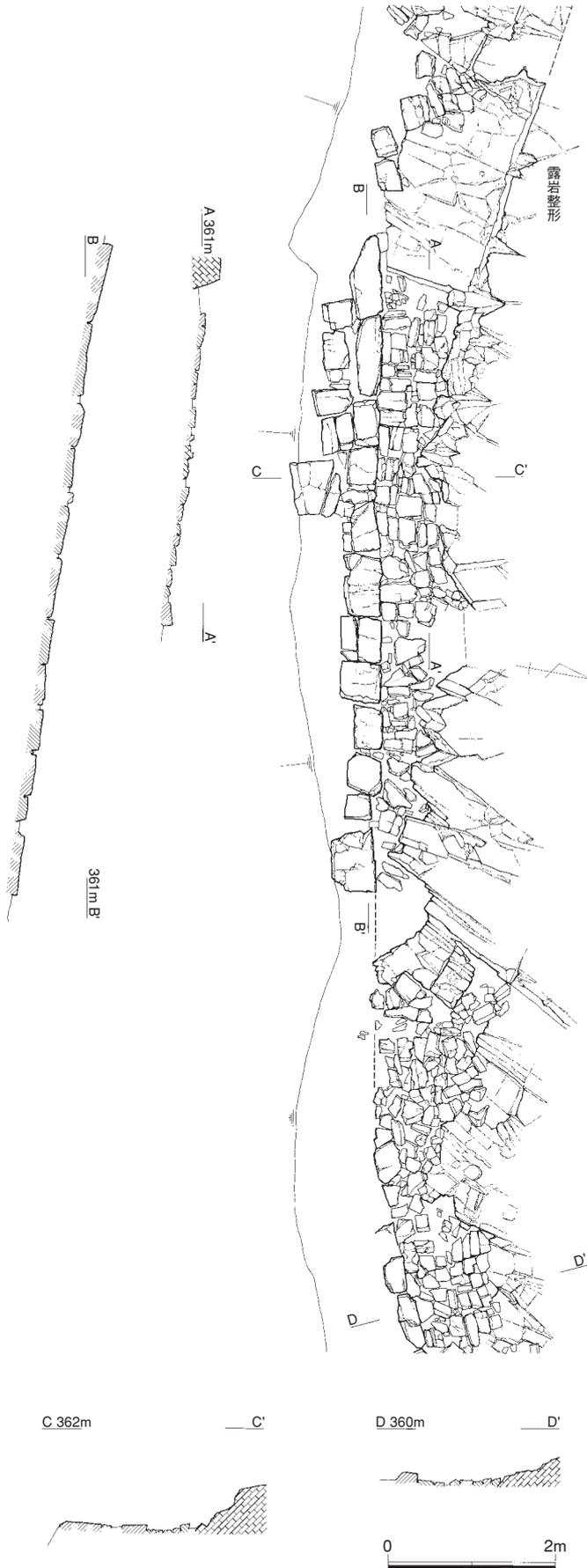
これまでの壘状区間は、鬼城山から派生する尾根の主軸線に平行するように構築されていたが、この区間のあたりからは主軸線に近くなるせい、斜面傾斜が緩くなり、多少だが残存状況はよい。それでも版築土塁は下部を除いて大半が流失し、また内側列石もすべて欠失している。

<外側列石> 尾部と頭部のあたりはアプライトの露岩を列石の代用としており、その間をアプライトを主材に花崗岩を混ぜながら1段1列に並べ置いている。幅40~80cmくらいの石材だが、高さはない。尾部側は露岩だが前面はよく揃っているが、列石はそのラインから15~30cmほど引いた状態で直線的に据えている。列石は全体として10度ほど次区間へ下降傾斜している。

<版築土塁> 版築土塁は下部の60~80cmほどが残存しており、中央部では部分的ながら1mほどが残る。立ち上がり角度はほぼ垂直とみていい。ここでも版築の各单位層は比較的長くのびている。最下層の基部をみると、まず尾部の露岩上から積み始めているが、露岩上部の高さを調節する積み方である。ついで中央部露岩の手前あたりから尾部へむけて、40cm弱の高さで積み上げて高さの調節をしている。さらに頭部側から同様の手法で積む。つまり、下降傾斜のあるこの区間では、傾斜の高い尾部側から始め、順次下方へずらしながら行っている。その上層もほぼ同種の手法であるが、大きな単位層となる部分の形状は、逆転した浅い皿状の大きなブロックの積み重ねの繰り返しといえよう。尾部側の露岩上の層は、厚くて粗い小ブロック状だが、中央部から頭部のあたりの層は薄い。ここでは4、5 壘状区間で検出したような板状痕はない。土質はアプライトの風化土であり、これは第4、5



第50図 第7墓状区間 外面及び城外側敷石平・断面図 (S=1/80)



第51図 第7 壘状区間 城内側敷石平・断面図  
(S=1/80)



第25図版 第7 壘状区間 列石と城外側敷石  
(東から)



第26図版 第7 壘状区間 城内側敷石(東から)

壘状区間と同様であるが、頭部寄りには花崗岩の風化土を用いた層もみられる。ここでも版築各層は堅くよく締まっている。

<城外側敷石> 敷石は小部分を除いてよく残っている。敷設の仕方は他区間と同様で、板状石の長辺を揃えて前端ラインとする。外側列石側も同様な据え方をし、間を丁寧に充填している。幅は1.4~1.6m前後で、他の区間と基本的に同じである。敷石は前方へ10度ほど下降している。作業単位的な短軸側のラインは二か所にみられるだけである。石材の99%まではアプライトの板状石である。この区間の敷石で特徴的

なのは、外側列石と板状石の間に20～30cmほどの空隙があることである。尾部の敷石と頭部の敷石の間は接しているが、この両者の間に空隙がある。敷石端部のラインは、列石側も前端側も揃っているから、地滑りによるものとは考えられない。基本的には、敷石は版築完工後に敷設されるのだから、この敷石空隙部分には版築があり、外側列石は埋め殺されていた、とみるのが妥当であろう。そのように考えれば、尾部にある露岩のラインとも揃うことになる。調査時の掘り過ぎによるものであり、反省の念を禁じえない。同様のところは次の第8墨状区間頭部にもある。

<城外側柱穴列と前面の造成> 柱穴列の検出調査はできていない。ただ、尾部の露岩に一見して人為的に掘り込まれたような上面15～25cm、下面12×12cm、深さ11cmほどの小穴がある。問題はこれが人為的なものなのか、剥落などの結果による偶然の産物なのかである。もし、柱穴だとすれば位置やこれまでにみた柱間距離が適性なのかということになろう。残念ながら外側列石と敷石の間の空隙部での柱穴の調査ができていないので如何ともしがたいが、位置的には通常の列石前面の柱穴位置より城内側に入っており、その点ではふさわしくないとと思われる。

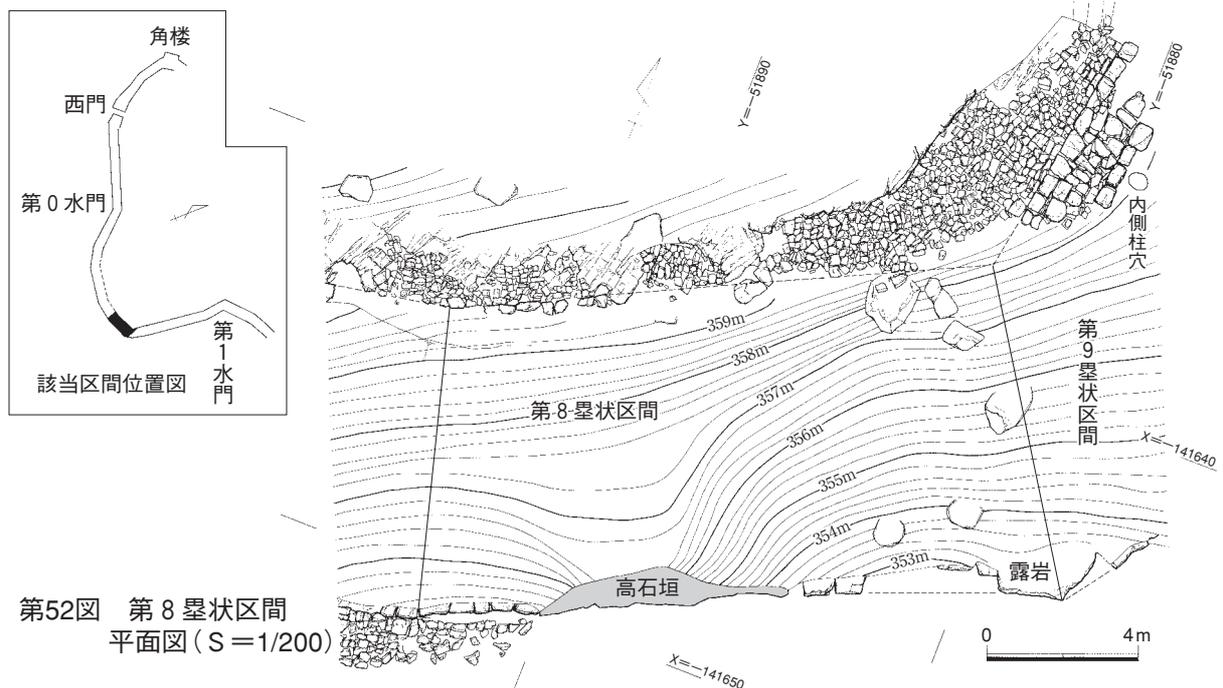
機会をみてもう一度確認作業をしたいと思っている。

前面の造成については、前区間より斜面傾斜が緩いためかなり広く、外側列石からいえば4m以上にわたって行われている。なお、土塁中の柱穴列については未調査である。

<内側列石と城内側敷石> 内側列石はすべて欠失している。また、城内側敷石の残存も少ない。しかしよくみると、10敷石が長辺を城塁と平行に面を揃えてきれいに並べている。石材も大きく、これは本来の城内側敷石の城内側の端面であることはあきらかである。それより城内側にも露岩との間を少し小さい石材で充填している。この状況は前区間と同様である。石材はすべてアプライトの板状石である。

これらの調査結果から、この第7墨状区間は第6墨状区間から16度内折する外側長16.5m、内側推定長15.4m、城壁幅は中央部で推定6.6m、高さは推定5.5mの区間となる。

### (5) 第8墨状区間



第52図 第8墨状区間  
平面図 (S=1/200)



第28図版 第8 壘状区間 高石垣（南から）

第27図版 第8 壘状区間から第7 壘状区間を望む（東から）

第7 壘状区間から15度内折して始まる区間である。区間の中央部に西門から反時計回りに進むと二か所目となる高石垣がある。石垣があるため、その背面の土塁は比較的よく残っている。しかし、ここでも城内側列石や敷石は欠失している。

<外側列石と高石垣> 外側列石は尾部の3 mほどの区間に5石が残っている。アプライトと花崗岩の双方を用いている。そこから先は現況下面長6.7m、上面長3.0m、高さ3.5mの高石垣がある。現況は三角形の頂部を切り落としたような形状である。石垣の前面と次区間側は急斜面のため、大きく抉れていて、石垣の下部を掘り下げて調査することはできなかった。しかし、次区間側は多少余裕があったので掘り下げたところ、2段になった石積みと外側列石1石を検出した。2段になった石積みは高さ80cmほどであり、多少動いているものの城外側敷石も数石ある。こうした状況からみると、石垣は1 m近くは埋まっているようであり、また次区間側へ2 m近くのびていたようである。ことによると、石垣前面に敷石もかなり残存している可能性もあると思われる。石垣の石材は殆ど花崗岩で、他の区間のものに比べるとやや小型材が多い。現況は風化がかなり進行し、黒っぽく変色し脆くなっている。大半は野面石の乱石積みのものであるが、2、3箇所横目地のおおところもある。また、一部に孕みだしもみられる。

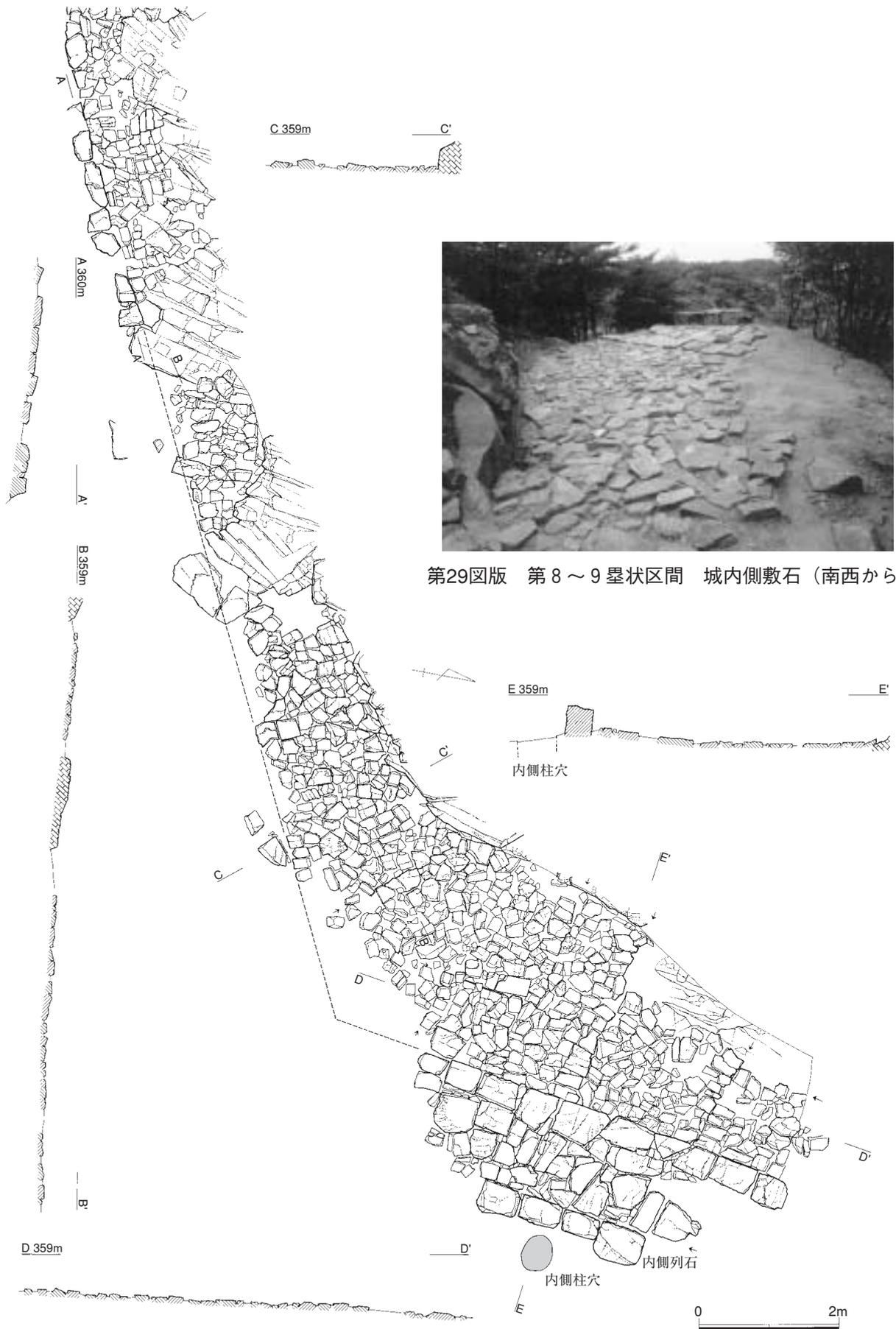
この石垣については、現況の形状が構築時のものなのか、両側が崩落しているのか、は周辺部を含めての調査ができていないので判断できない。長さはさきにみたように少し大きくなるようだが、高さはどうか。現況の天端は内側列石を欠失しているが、他区間に比べやや低いようである。現況の石垣の上部は積み方が少し違うようであり、あるいは後世の積み直しの可能性もないではない。こうした状況であるから、形状や規模についてはこれ以上は踏み込めない。

石垣から次区間へかけては外側列石が2石あり、大きな露岩に接している。この露岩は次区間への折れにもなっているが、先の2石と露岩の前端は揃っておらず、列石が50cmほど引っ込んだ状態である。現状はこのあたりが流水路になっている。

<版築土塁と城外側敷石、柱穴列> 版築土塁は列石上に20cmほど残っているだけである。前区間との折れのところには、版築層の明瞭な変化はなく、一体的に構築しているようである。

城外側敷石の残存は僅かだが、列石側の端面材はよく残っている。ここでも列石と敷石の間に20cm前後の空隙がある。敷石の長軸側は10度ほど下降傾斜している。

列石前面と土塁中の柱穴列の調査はできていない。石垣前面を掘り下げることは危険であり、敷石



第29図版 第8～9 壘状区間 城内側敷石（南西から）

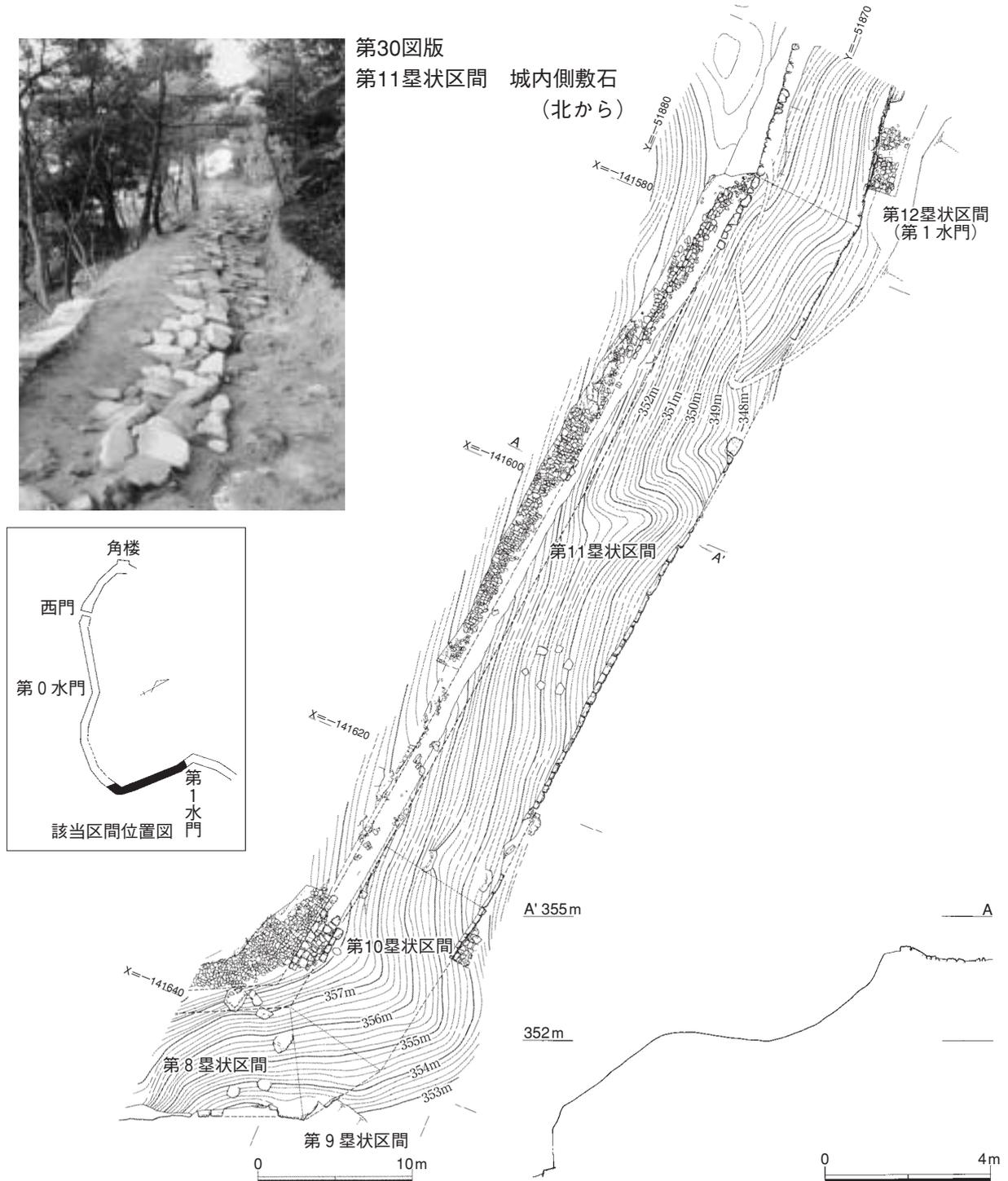
第53図 第8・9 壘状区間 城内側敷石平・断面図（S=1/80）

も含めて調査ができなかった。

調査後、石垣の次区間側は流土防止のため土嚢を積んで保護している。

<内側列石と城内側敷石> 内側列石はすべて欠失しており、城内側敷石も殆どといっていいほど欠失している。しかし、敷石の城内側端部となるラインに6石ほどが残存している。このラインと前後区間のラインから、おおよその状況は窺うことができる。また、ここでも露岩がのぞいており、敷石との空隙をやや小型の石材で充填している。石材はアプライトである。

これらの調査結果から、この第8 塁状区間は第7 塁状区間から15度内折する外側長16.7m、内側推



第54図 第9～11塁状区間 平面図 (S=1/400)、断面図 (S=1/150)

定長15.1m、城壁幅6.8mで、中央部に高石垣をもつ区間となる。

#### (6) 第9 壘状区間

この区間は鬼城山から東南に派生する尾根の稜線を横切る区間であり、ここから大きく内折してほぼ直線状の区間が長くつづき、やがて第1・2水門へといたる小区間である。

<外側列石と版築土塁> この区間の調査は、平成12年にトレンチで掘り抜いたが、整備委員会の指導で前面の流土の除去は行わなかった。このため図化作業はできていない。外側列石はアプライトと花崗岩の併用で、部分的には露岩で代用しているところもある。前区間との折れ部分には露岩で代用していたが、次区間との折れは列石で確認できた。それによると、この第9 壘状区間は第8 壘状区間から35度という大きな各度で内折している。版築土塁も数十cm残存しており、堅くよく締まっている。幅の狭いトレンチであったが、残存を確認している。地形からみるとかなり保存の良い状態で残っている可能性がたかい。

<内側列石と城内側敷石> 前区間の第8 壘状区間の城内側敷石推定ラインの延長線と、次区間の第10 壘状区間の延長ラインは、屈折することなく交わる。敷石についてもこのあたりは欠失している。

これらの調査結果から、この第9 壘状区間は第8 壘状区間から大きく32度内折する外側長5.1m、内側長0 m、城壁幅6.5m、高さ不明の区間ということになる。

#### (7) 第10 壘状区間

この区間も鬼城山から東南に派生した尾根の稜線上を横切るところで、次区間あたりからは尾根斜面から谷部となり、流水を直接的に受ける区間である。このため土塁の流失は著しい。

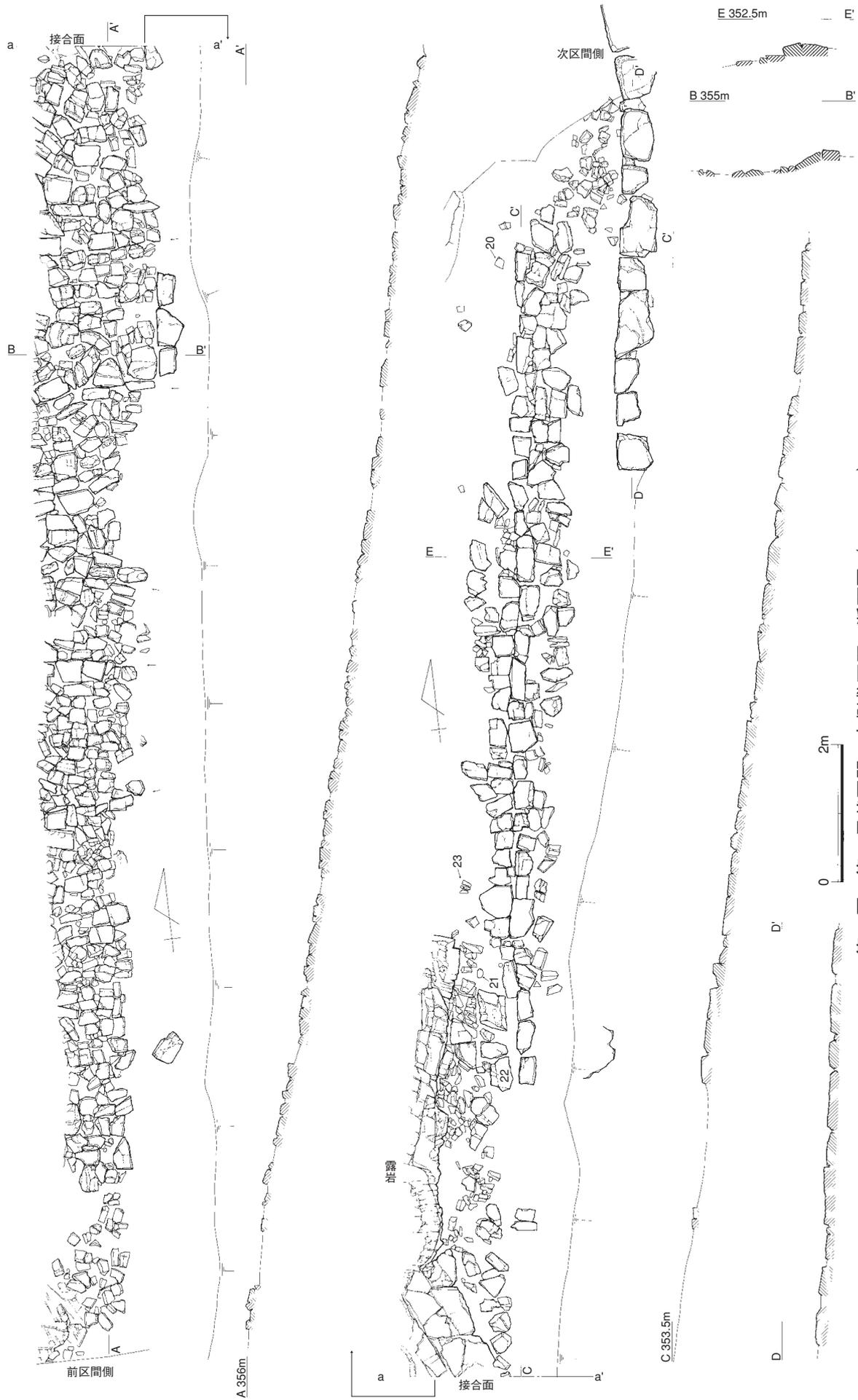
<外側列石、版築土塁と城外側敷石> 尾部で前面の流土を除去し列石、版築、敷石を検出したが、それより頭部側へかけては流土を除去していない。

外側列石はよく残っている。一部に露岩を代用しているが、アプライトと花崗岩で列石とし、次区間との折れも確認できる。大きさは30～40cmぐらいの石材を用いているが、高さはない。版築層は最大で1.5mほど残っており、堅くよく締まっている。アプライトの板状石を用いた敷石も良好に残っているが、ここでも中央部から尾部側にかけては、列石と敷石の間に10～20cmほどの空隙がある。敷石は前面に向けて緩く下降しているのは、他区間と同様である。

この尾根の稜線あたりの傾斜は緩いが、両側の斜面は急斜面である。

<内側列石と城内側敷石> 第5～9 壘状区間の内側列石はすべて欠失しているが、この区間の尾部には辛うじて4石が残っている。またこれから先の区間も同様で、50mほど先の第1水門の手前まではすべて欠失している。残存する4石の石材はアプライトで、幅50～60cm大のものを立て並べて高さ30cmほどで揃えている。敷石も城内側端部には長辺50cm以上のやや大型材で揃え、空隙を丁寧に充填している。残存する敷石は次区間側へは2度、城内側へは4度下降傾斜している。この敷石上には20cm大の円礫15個が平成8年度の調査で検出された。今回の調査でもまとまった状態ではないが、数個の円礫が出土した。この敷石から城内側2m弱のところには露岩があるが、その間にも高さ10cmほど低く、敷石より小型材で透き間なくびっしりと敷き詰めている。ただ、前区間との境になる部分には明瞭な区分はなく、一体的な作業であった様子がうかがわれる。

なお、内側列石に接した土塁中で検出面で52×42cmの柱穴が検出された。



第55図 第11罫状区間 内側敷石平・断面図 (S=1/80)

これらの調査結果から、この第10壘状区間は第9壘状区間から24度外折する外側長12.4m、内側長は推定する術がないが12.1m前後？、城壁幅7.1mの区間で、城壁内外に敷石をもち土壘中にも柱穴をもつ区間となる。

#### (8) 第11壘状区間

この区間から第1水門までの間は、いくつかの区間に別れるのか、それとも一つの区間を構成しているのか、その見極めが難しい区間である。それというのも第10壘状区間から10度内折して区間が始まるのは間違いないが、次の第1水門までの間に完存に近い状態で残る外側列石の二か所に、折れとも石材のずれともみえるところがある。一つは尾部から23.1mのところに4度ほど外に開くところであり、もう一つはそこから14.1m先で3度ほどの内折れ状の癖がある。ところがそれを確認しようにも内側列石はすべて欠失しており、またその手掛かりともなる城内側敷石のラインも、敷石が欠失しているため掴みきれない。ただ、外側列石のその状況は折れというよりも石材のずれ、あるいは並べ方の問題のようにも思える。他区間でも多少の出入りはある。また、地形をみても強いて折れを形成する必要もないところと考えられる。したがって、ここではこの区間を一つの区間とみて報告することとする。

<外側列石と低石垣、版築土壘> 一つの区間と見なせば、この区間の外側長は53.6mとなる。このうち頭部の8.4mは低石垣で築かれている。列石は次区間へ向けて7度下降している。石材は40～150cm大までのものを含み、花崗岩を主材とする。列石前面の流失が著るしく、中には石材の底面が露出しているものもある。

低石垣は区間の頭部にあり、折れを境にして第1水門と分かれる。石材は殆どが花崗岩で、方形や長方形だが、水門の石材よりは小型材である。横目地がよくとおりの高さは1.5mほどで、水門の天端高と同じ高さである。

鬼ノ城の石垣は城壁の上部まで築かれたいわゆる高石垣だが、こうした高さ1mくらいの低石垣も数箇所にある。

版築土壘の調査は実施していないが、一部の区間に僅かに残るのみで殆ど流失している。

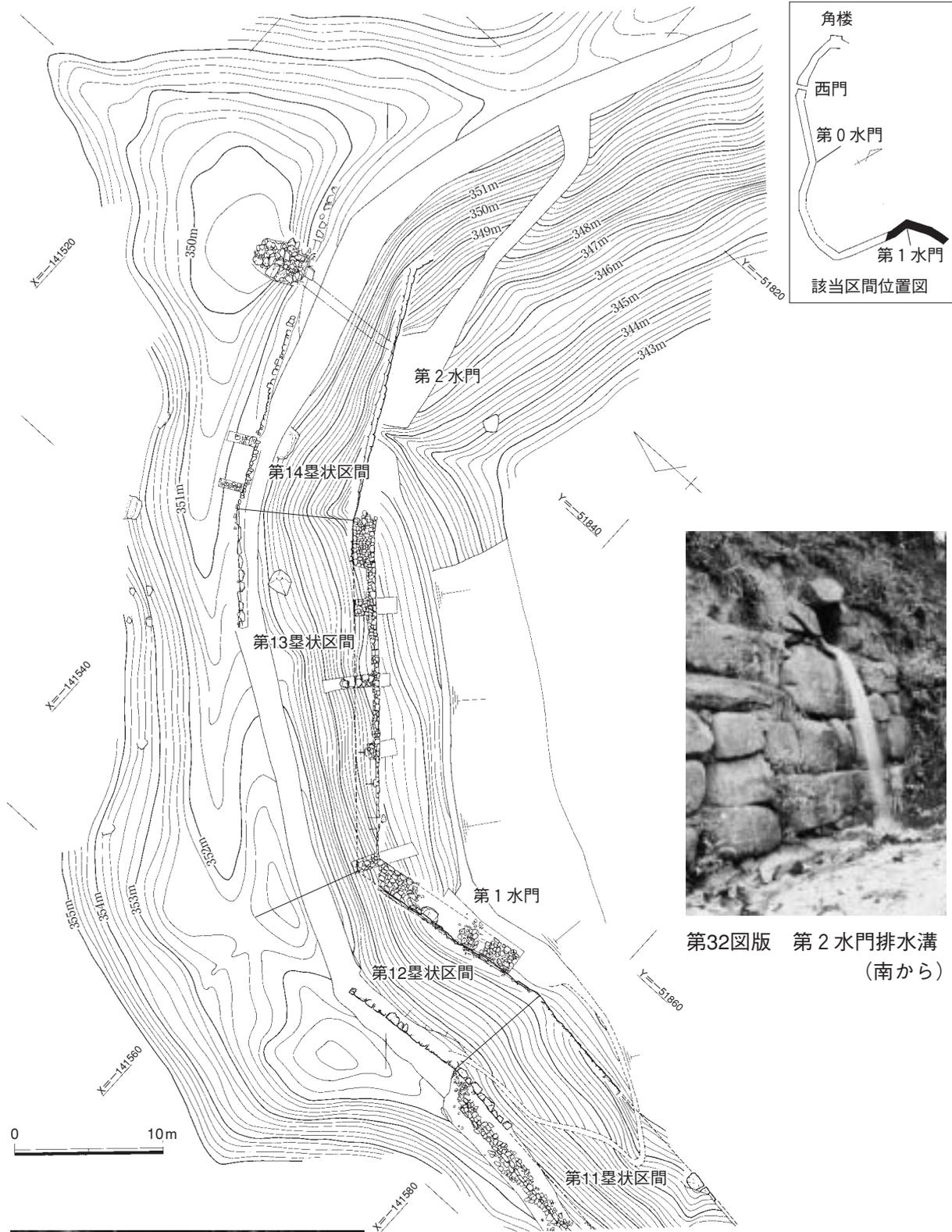
敷石は尾部と頭部の低石垣の前面に僅かに残っているのみである。しかし、城壁構築時にはいま欠失している部分にも敷かれていたであろうことは疑いないであろう。

<内側列石と城内側敷石> 内側列石は頭部に数石が残るだけである。城内側敷石も頭部に城内側端面となる10余mが残るだけで、他は欠失している。ただ、こうした敷石と城内側の部分にも他区間と同様にアプライトの板状石を敷き詰めている。それも尾部側の流失が著るしく、ほとんど残っていない。現地形をみても流水方向がわかるようで、いかに水による侵食、破壊が進んだのかを窺わせているようである。

これらの調査結果から、この第11壘状区間は第10壘状区間から5度内折する外側長50.2m、内側推定長50.0m、城壁推定幅7.3～7.5mの区間で、頭部8.4mに低石垣をもつ区間となる。

#### (9) 第12壘状区間 (第1水門)

第1水門については、平成8年度に石垣前面に崩落した流土を除去し、概要を報告した。その後、平成10年度には石垣上部にある1石は排水溝の側壁が倒れ、そのために落ちた蓋石ではないかと考え

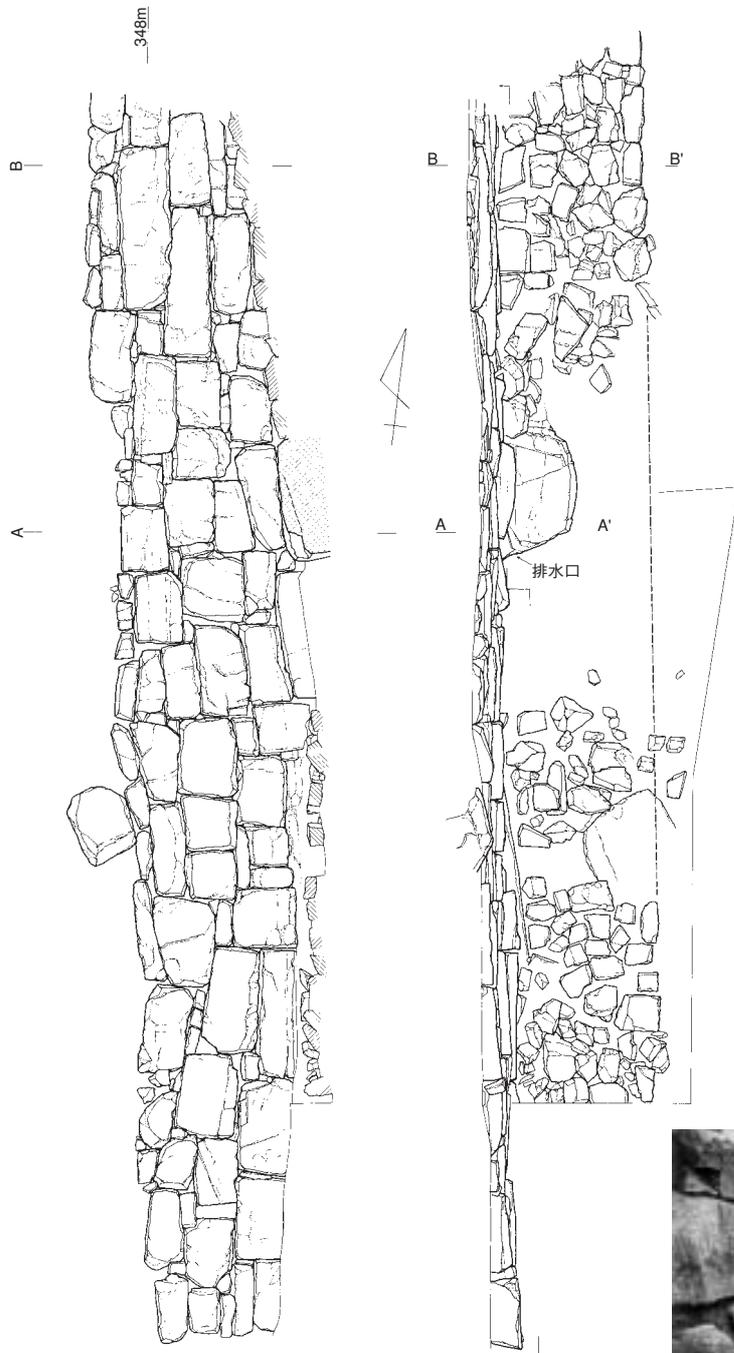


第32図版 第2水門排水溝 (南から)



第31図版 第12~14壘状区間 (北東から)

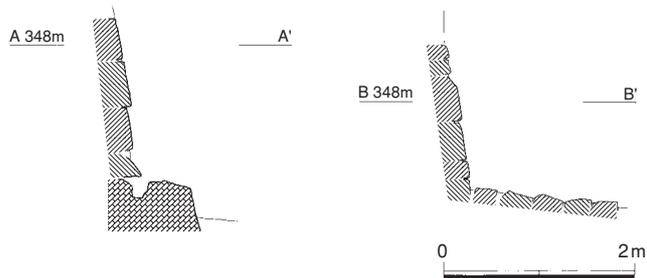
第56図 第12~14壘状区間 平面図 (S=1/400)



第33図版 第1水門排水状況  
(南から)



第34図版 第1水門敷石 (南から)



第57図 第1水門石垣 立・平・断面図 (S=1/80)

て調査し、また平成12年度に新たに第0水門が発見され、前面に集水桝をもつことが確認されたことから、第1水門も第0水門と同様に排水溝をもたない水門であり、また前面にすこし平坦面をもつことから、あるいはここにも集水桝のようなものがあるのではないかと考え調査した。集水桝はなかったが、敷石の一部が残存していた。これらのことについてはすでに報告してきたが、ここで改めて簡略にまとめておきたい。

第1水門は前区間頭部の低石垣から12度内折して構築している。水門の石垣は長さ14.6m、高さ1.6mの規模をもつ。基本的には3段積みで、その上段に高さ調整の低い1段を積む。方形や長方形材を用いており、横目地がよく通る。透き間を小材で丁寧に充填するとともに、上段の石材を下段の2石に架けて安定と堅牢化を図っている。鬼ノ城の水門の排水溝は石垣最上段に設置されているが、調査の結果この第1水門には排水溝は設置されていないことが判明した。いわゆる自然通水の水門である。石垣最上段に置かれた1石は、上から転落したような状況ではなく、しっかりと2石の間に咬ませたような状態で据え置かれていた。石垣の上面には版築土塁が積まれるから、この石もともに版築で固定された状態であったと思われる。なんらかの指標的なものだったのだろうか。これに似た状況は少し粗雑で位置が偏っているが第0水門の石垣上段にもみられる。

排水は三、四箇所から自然排水されており、その一つには露岩の一部を摂理に沿って剥ぎ取り、水路状にしているところもある。水門石垣の中央部のあたりは、露岩の上に構築されているが、その両脇には敷石が敷設されている。

集水桝は設置されていなかったが、水門石垣の構築の仕方や前面の敷石の敷設など、入念堅固な作業には改めて感心する。

#### (10) 第13壘状区間

この区間は第1水門と第2水門に挟まれた区間で、一見して残存状況のよさそうな区間である。平成8年度に二つのトレンチをいれ調査した。予想どおり版築は外面側で2.5~3.0mも残っていた。これまでの他区間の調査ではよくて1m前後であるから、その残存の良さがわかる。

調査はこの他に平成12年度に第2水門との折れのあたりと二つの小トレンチによるものがある。なお、今回は敷石前端線のみを調査しており、背面側の調査は行っていない。検出した敷石には殆どすべてに被熱痕跡があり炭、焼土が出土した。樹種鑑定は(財)元興寺文化財研究所に依頼し、杉・五葉松・ヒノキ・モミ・ヤマウルシという鑑定結果であった。

この区間は第1水門から54度外折する外側長24.7m、内側推定長27.5m、城壁推定幅7.7m、高さ5.2m以上の区間である。版築土塁の残存度がきわめて良好だから、外側列石は完存しているであろうし、城外側敷石も完存とみてよい。敷石は調査部分でみるかぎり、丁寧に隙間なく敷き詰めている。第2水門との境になるあたりは、流水路になったためか版築も流失しているところが多い。

内側列石は頭部に8mほど露出しているが、尾部から中央部にかけては埋まっているのか、欠失しているのか、見えない状態である。

#### (11) 第14壘状区間 (第2水門)

鬼ノ城では、最も著名な水門である。昭和53年の調査により報告(『鬼ノ城』 鬼ノ城学術調査委員会 昭和55年)されており、総社市教育委員会による今回の調査は前区間との折れのあたりだけである。

この区間は第13塁状区間から14度外折する外側長16.4m、内側推定長15.0m、城壁幅7.6m、高さ5.3～6.5mの区間である。

今回の調査では、前区間との折れのところの城外側で柱穴が1穴検出された。敷石はないが本来は敷設されており、流失したものと思われる。しかし、石垣は露岩の上に構築されているから、敷設された範囲は限られたものであろう。

調査後、背面の集水口から上流の一部を修復した。それというのも水みちが変わり、排水溝からは排水されておらず、来訪者にとっては水門のイメージがつかみにくい状態になっており、保存の面からみても本来流れるべきところへ流れず、他へ流れることは遺構に影響を与えることにもなると判断した。そこで集水口から上流にかけて捨石されている上にビニールを敷いて漏水を防いで集水口へ導水し、排水溝内に塩ビ管をいれて排水するようにしている。

表3 第3塁状区間～第14塁状区間 各部計測値

区間名称	外側長m	内側長m	折の方向	城壁 下底幅m	高さm	前面柱穴 間隔cm	土塁中の 柱穴間隔cm	備考
第3塁状区間	69.0	65.0	-	7.5～8.0	6.3～7.5	-	2.7～3.3	
第4塁状区間	32.0	34.5	33°外折	6.8～7.7	5.3	290	300～320	城内側に3段の敷石
第5塁状区間	18.5	16.6	19°内折	7.3～7.7	5.3	290～300	280～300～370	
第6塁状区間	28.2	24.4	22°内折	6.8～7.3	5.3	280		
第7塁状区間	16.5	15.4	16°内折	6.6～7.2	5.5			
第8塁状区間	16.7	15.1	15°内折	6.8～7.0				高石垣あり
第9塁状区間	5.1	0	32°内折	6.6～6.9				
第10塁状区間	12.4	12.1	24°内折	6.6～7.7				
第11塁状区間	50.2	50.0	5°内折	7.3～7.7				頭部に低石垣
第12塁状区間(第1水門)	15.0	17.5	14°内折	7.0				
第13塁状区間	23.7	27.5	54°外折	7.7	5.2～			
第14塁状区間(第2水門)	17.4		14°外折	7.6	5.3～6.5			城内側敷石に被熱痕

城壁下底幅及び高さは推定を含む

註1 村上幸雄「鬼ノ城の概要」『吉備地方文化研究』第14号、就実大学吉備地方文化研究所、2004年

註2 ・北垣聰一郎「石垣」『日本城郭体系』別巻Ⅱ、新人物往来社、昭和56年5月25日

石垣用語については北垣氏の御教示を得た。

・田中哲雄「城の石垣と掘」『日本の美術』第403号、至文堂、1999年12月15日

・鈴木啓『図説 城の石垣の歴史』纂修堂、平成7年10月26日

・田淵実夫『石垣』ものと人間の文化史15、法政大学出版局、1975年4月1日

・三浦正幸『城の鑑賞基礎知識』、至文堂、1999年9月16日

註3 外側列石と外側敷石の間に隙間が生じている例は、一般的に少なく、版築作業中に土圧によって堰板が膨らみ、型枠の解体後、壁面を整形せずに外側敷石を敷設した可能性もある。

H12・T28のように列石の前面まで版築層が及ぶ例は、むしろ特殊である。

註4 『総社市埋蔵文化財調査年報』7、総社市教育委員会、1997年

註5 L字形加工は宮地岳城、おつぼ山城、女山城、御所ヶ谷城等で確認できる。

註6 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第208集『県指定史跡甲府城跡 稲荷櫓台石垣改修工事報告書』山梨県、2003年3月31日

報文でいう栗巻石には、次のような特徴が述べられている。

- ・石材の大きさや形状に特別な規格性はない。
- ・積み上げ方に特別な技術はない。
- ・盛土側に面合わせしている。
- ・面の傾斜はおおよそ70～80°前後である。
- ・積み上げ段数は2～3段程度である。



第58図 北門跡平面図 (S=1/300)